

岐阜大学教育学部生の英語力に関する研究（２）

A Study on English Ability of the Students of Faculty of Education, Gifu University(2)

伊藤 徳一郎・伊東 英・廣田 則夫・大和 隆介¹⁾

ITO Tokuichiro, ITOH Suguru, HIROTA Norio, YAMATO Ryusuke

0. はじめに

「使える英語力」の育成という社会的要請に対する本学教育学部における英語教育の実状を検証する一環として、我々は、伊藤 他（2004）において、在学生の英語力の実態調査を行い、その分析を行った。その結果、

- ・本学部の1年生と2年生の英語力にほとんど違いが見られないこと、
- ・入試における英語受験の有無と学生の英語力には明確な相関が見られ、入学時での英語力の差が2年次以降においても継続する可能性が高いこと、
- ・学生の専攻により、入学時における英語力に違いが見られ、その違いが2年次以降も継続する可能性が高いこと、
- ・技能別の英語力について比較すると、リスニングよりリーディングにおいて専攻間の差が際だって見られること、

等々が、明らかになった。この調査結果を基に、伊藤 他（2004）は、

- ・小学校において、「総合的な学習の時間」において英語活動が浸透し、全ての学級担任が英語の指導をしなければならない状況において、1・2年生の英語カリキュラムの改善を検討するだけでなく、学部教育全体の中での英語教育のあり方を見直す必要があること、
- ・入学時点での英語力を在学中の4年間で、教室の内外の活動を通して効果的に伸ばしていく具体的な方策の確立が必要であること、
- ・音声言語と文字言語とのバランスのとれた指導が必要であること、
- ・英語の授業内容を横並びに一律とするのではなく、学生の実態に合わせた授業内容・方法を工夫する必要があること、

等を指摘している。

また、平成14年11月に岐阜大学全学共通教育委員会によって出された『「学生による授業評価」報告書』にある学生の自由記述欄においても、

- ・全学共通教育の英語の授業がほとんど全ての学生に対して必修あるいは選択必修とされ、それぞれのクラスが機械的に割り振られ、あらかじめ指定されるにもかかわらず、各クラスの授業内容・レベル・方法に大きな差異が感じられることに対する不満、
- ・同じ授業科目名で履修していても、割り当てられたクラスによって評価の基準が大きく異なって感

- じられることに対する不満，
・シラバスあるいは授業開始時のガイダンスでの授業担当者による説明不足に起因すると思われる不満，

が述べられている。このような学生の意見に関して、同報告書の「既修外国語分科会（英語）としての見解等」では、学生の英語力・興味・関心を無視した機械的な割り振りによるクラス指定方式に問題があること等を指摘し、授業担当者ごとのシラバス作成、学生によるクラス選択制の導入、標準的な英語力の達成基準（目標）の構築、プレースメントテストの導入等々、本学英語教育の今後の改善に向けた示唆がなされている。

語学教育の改善を図ろうとする場合、学習者、授業者、そしてそれらを取り巻く社会（大学）それぞれが抱く語学教育に対する理念・期待を無視して進めるわけにはいかない。『「学生による授業評価」報告書』において、すでに本学学生が本学語学教育に対して抱くイメージがある程度具体的に把握できる。本研究は、本学部学生の英語力に関する調査（伊藤 他，2004）を受け、さらに、本学部学生のもつ外国語学習への興味・関心および外国語学習に対する意欲について、量的・質的に明らかにしようとするものである。

1. 本 研 究

本学教育学部学生が英語学習に対してどのような意欲や関心を持ち、それが学生の専攻や学年あるいは習熟度とどのような関係にあるのかを調査分析する。

1.1. 研究課題

本調査の主たる目的は、本学部学生の英語学習に対する動機付けを把握することであり、以下の4つの具体的課題を明らかにしようとするものである。

- 本学部生の英語学習に対する意欲・関心は、英語習熟度によりどのように変化するか。
- 本学部生の英語学習に対する意欲・関心に関して、専攻により差異が存在するか。
- 本学部生の英語学習に対する意欲・関心は、入学時から学年進行とともにどのように変化するか。
- 本学部生は、岐阜大学の英語の授業をどのように評価しているか。

1.2. 方 法

1.2.1. 参 加 者

質問紙による調査は、教育学部1年生（262名）、2年生（211名）および4年生（141名）。面接調査の参加者は、教育学部3年生（35名）。合計649名の学生である。

1.2.2. 材 料

(1) 英語学習に関する質問紙

本調査において、学生の英語学習に対する意欲・関心の程度を測る材料として用いたGardner（1985）のAMTB（Motivational Intensity and Desire to Learn English in Attitude/Motivation Test Battery）を基に作成した33項目からなる質問紙である。その構成は、「動機付けの強さ（Motivational Intensity）」10項目、「英語学習に対する願望（Desire to learn English）」10項目、「英語学習に対する関心（Interest in English study）」5項目、「英語学習の志向性（Orientation）；統合的志向性4項目、道具的志向性4項目」計8項目、および「英語学習に関する不安感（English Class Anxiety）」5項目である（資料1参照）。

(2) 英語学習に関する面接調査用紙

本学部学生が岐阜大学で開講されている英語の授業に対して、どのような印象を持ちどのように評価しているのかについて、より詳細なデータを得るために面接調査を行った。その際、面接者が同様のトピックについて一定の観点からデータを収集できるように面接用調査用紙を作成した（資料2参照）。

(3) TOEIC Bridge用の模擬試験問題

1.2.3. 手順

(1) 質問紙による調査

1年生および2年生に対しては、全学共通教育科目の英語A1の時間において、2年生に対しては教育学部専門基礎科目である外国語コミュニケーション(英語)において、筆者等が分担して研究の目的を説明したのち回答してもらった。4年生に関しては、4年生対象の履修登録ガイダンス終了後に同様に実施した。

(2) 面接による聞き取り調査

専攻ごと(文系, 理系, 実技系)に無作為に選んだ学生約35名に対して、昼休みの時間を利用して、筆者らが分担して面接調査を行った。面接は面接調査用紙に沿って行い、応答は全て録音し、書き起こしたものを分析した。

(3) TOEIC Bridge用の模擬試験問題の英語習熟度の判定

習熟度に関しては、本研究の先行研究となる、伊藤他(2004)において報告した本学部生の英語習熟度のデータを利用することとした。したがって、本研究に参加した学生のうち4年生は、この試験を受験していない。

1.3. 質問紙調査の結果と分析

1.3.1. 分析の方法

本調査で用いた質問紙は4つのセクションから構成されているが、その妥当性を確認するために、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。表1は、抽出された6因子(累積説明率53.9%)に関してプロマックス回転後の各項目の因子負荷量(.40以上)を示したものである。

表1から、抽出された6因子が、それぞれ質問紙の各セクションにかなり正確に対応していることがわかる。因子1に関しては、「英語学習に対する願望(Desire to learn English)」10項目のうち7項目が高い負荷量を示している。同様に、因子2に関しては「動機付けの強さ(Motivational Intensity)」10項目のうち7項目が、因子3に関しては「英語学習に関する不安(English Class Anxiety)」5項目の全ての項目が、因子4に関しては「統合的志向性」4項目の全ての項目が、因子5に関しては「英語学習に対する興味(Interest in English study)」5項目のうち3項目が、そして最後に因子6に関しては道具的志向性4項目の全ての項目が高い負荷量を示している。したがって、因子の命名に当たっても質問紙作成時の各セクションの構成概念をほぼそのままの形で当てはめることが可能である。命名に際して、特に変更を必要とするのは因子1と因子2だけであった。

因子1は、因子負荷量が.40を示した11項目のうち、Q19「英語の授業では、できるだけ英語を使うようにする」を除いては全て、学習者が英語の授業以外で英語に取り組む積極的姿勢を表している。したがって、因子1は「授業外での英語学習に対する積極性」と命名することが妥当と考えられる。次に、因子2に関しては、因子負荷量が.40を示した8項目のうち、Q5「英語の勉強の仕方を振り返ると、本気で英語を学ぼうとしているといえる」とQ16「英語の学習は面白い」を除いて、全て学校での英語の授業に関して積極的に取り組む姿勢を示している。しかもQ5とQ16についても英語の授業に関わりの深い内容である。したがって、因子2は「英語の授業における積極性」と命名することが妥当であると考えられる。

以上の結果、最終的に、抽出された6因子は以下のように命名することにした。

- 因子1: 「授業外での英語学習に対する積極性」
- 因子2: 「英語の授業における積極性」
- 因子3: 「英語学習に関する不安感」
- 因子4: 「英語学習に対する統合的志向性」
- 因子5: 「英語学習に対する関心」
- 因子6: 「英語学習に対する道具的志向性」

表1 6因子のプロマックス回転後の因子負荷量

質 問 項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
q18 英語の映画のチケットをもらったら、必ず観に行く	.89					
q17 テレビの英語の番組がある程度理解できれば、その番組をできるだけみる	.87					
q11 近所に英語を話す家庭があれば、できるだけ親しくするようにする	.85					
q12 授業以外で英語を使う機会があれば、たいてい英語を使い日本語は必要などきだけ使うようにする	.80					
q10 ラジオなどで英語の歌を聞いているとき、注意深く聞いて英語の単語を聞き取るようにする	.76					
q09 テレビで英語の番組があれば、積極的に見るようにする	.67					
q20 時間と英語の知識があれば、できるだけ英語の雑誌や新聞を読む	.67					
q25 外国語を話す人たちと会って話を聞くのが楽しい	.67					
q02 学校で英語を勉強するだけでなく、日常生活の中でできるだけ英語に接するようにする	.60					
q19 英語の授業では、できるだけ英語を使うようにする	.60					
q14 学校に英語のクラブがあれば、積極的に参加する	.54					
q04 英語の宿題をするときは、注意深く考え、しっかり理解しているか確認する		.96				
q03 英語の授業でわからないことがあれば、友達や先生に尋ねて教えてもらう		.89				
q06 英語の宿題が余分に出るとしたら、積極的にやる		.85				
q07 英語の宿題が返されたら、やり直して間違いを訂正する		.77				
q05 英語の勉強の仕方を振り返ると、本気で英語を学ぼうとしているといえる		.69				
q08 英語の授業では、質問に対して積極的に答えようとする		.62				
q01 英語の授業で学んだことについて積極的にしばしば考える		.56				
q16 英語の学習は面白い		.40				
q37 授業で英語を話すとき、緊張してどきまぎしてしまう			.87			
q35 英語の授業中、自分の話す英語に自信が持てない			.82			
q34 英語の授業で自ら質問に答えるのは恥ずかしい			.79			
q38 英語を話す時、他の学生が私のことを笑うように思って不安だ			.71			
q36 他の学生の方が、自分よりも英語を上手に話すと思う			.71			
q26 英語学習が大切なのは、英語圏の人々とうまく付き合うことができるようになるからだ				.82		
q28 英語学習が大切なのは、英語圏の人々をより深く理解することができるようになるから				.80		
q29 他の文化を持つ人々の活動により自由に参加することができるようになるからだ				.65		
q27 英語学習が大切なのは、より多くの人たちと出会い話ができるようになるからだ				.65		
q21 外国へ行く機会があれば、その国の言葉を話したいと思う					.64	
q23 外国語が自由に話すことができたなら良いと思う					.64	
q22 日本は外国人との直接の交流は比較的少ないが、日本人にとって外国語を学ぶことは重要だと思う					.61	
q32 英語を学習するのは、将来の就職に役に立つからだ						.76
q33 英語を学習するのは、英語ができれば周囲の人から高く評価されるからだ						.75
q30 英語を学習するのは、入試や単位を取るために必要だからだ						.71
q31 英語を学習するのは、英語が使えれば沢山の知識を得やすくなるからだ						.41

1.3.2. 研究課題の分析

本節では、因子分析によって得られた6つの因子に関して、因子得点（各因子を構成する質問項目に対する回答の平均値）を求め、その得点が学生の専攻、学年、英語習熟度によりどのように変化するかを分散分析により検証する。研究課題についての分析を行う前に、まず本調査に参加した学生全体の英語学習に対する全般的傾向を見ることにする。

図1は、本調査に参加した学生全体の各因子得点の平均値を示したものである。因子得点の平均が最も高かったのは、因子5「英語学習に対する関心」であった。その4.41という高い値は、本学部生が英語学習に非常に強い関心を抱いていることを示していると言えよう。しかしながら、因子1「授業外での積極性」、および因子2「授業での積極性」の結果を見てみると、その平均値がそれぞれ2.85と3.05とかなり低い値となっている。これらの事実は、本学部生は、英語学習に対して高い関心を抱いているにもかかわらず

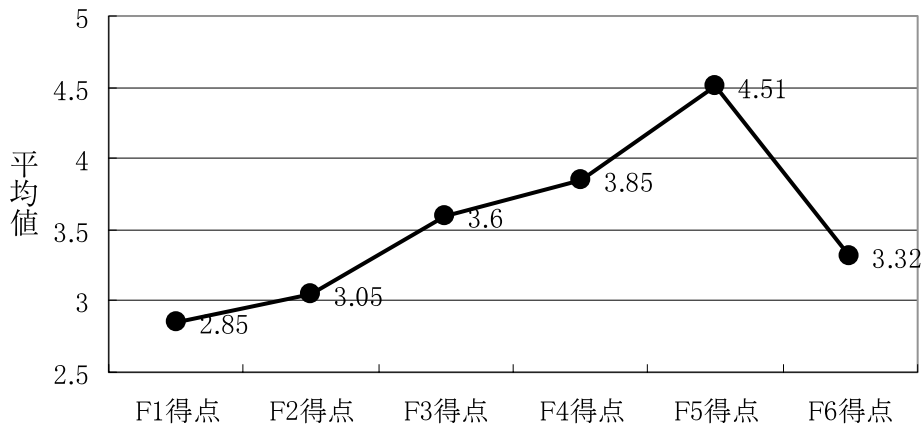


図1 英語学習に対する意欲・関心

ず、実際の学習行動を取るための積極性に欠けているという現状を表していると解釈できよう。

また因子3「英語学習に対する不安感」に関しては、平均値が3.60と比較的高い数字となっており、少なからぬ学生が英語を学習する場面においてさまざまな不安を感じていることが読み取れる。英語学習に対する志向性を示す因子4「統合的志向性」と因子6「道具的志向性」に関しては、統合的志向性の値が道具的志向性の値を上回っている。これは、大学生となり入学試験の呪縛から解放され、異文化理解やコミュニケーションの道具としての英語学習本来の学習目的をより多くの学生が意識するようになってきたことの表れであろう。

このような因子得点に見られる全体的傾向は、研究課題に挙げた学習者要因(英語習熟度, 専攻, 学年)によって、どのように変化するのであろうか。以下、順次見ていくことにする。

(1) 研究課題1(英語学習に対する意欲関心と英語習熟度との関係)について

英語の習熟度の判定には、TOEIC Bridge用の模擬試験問題の結果を利用した。したがって、この試験を受験した1年生と2年生のデータについてのみ分析の対象とした。その結果は表2に示したとおりとなった。表2における上位群は、模擬試験の平均値に標準偏差を加えた数字以上の得点を得た学生のグループである。下位群は、平均値から標準偏差を減じた数字以下の得点を得た学生のグループであり、残りの学生が中位群を形成している。

表から分かるように、因子4「英語学習に対する統合的志向性」を除いて、それ以外の全ての因子に関して習熟度による有意差が存在した。LSD法による多重比較を行った結果、成績が上位になるにつれて、英語学習に対する興味関心のみならず、授業内外において積極的姿勢も高まる傾向にあることが認められた。しかしながら、その因果関係についての解釈は容易ではない。「興味を持ち積極的に学習したから高い英語力につながった」のか、それとも「高い英語力があるからこそ、いっそう興味を持ち積極的に学習する」のか、現時点では判断することは難しい。

表2の結果でもうひとつ注目すべきことは、得点上位者は、「英語学習に対する積極姿勢」が見られる一方で、「学習不安」が低い数値を示していることである。この2つの要因の相互関係を調べるために、ピアソンの相関係数を両側検定で求めたところ、 $r = -.215$ ($p < .01$)と弱い負の相関が認められた。したがっ

表2 習熟度による因子得点分散分析

	F1得点	F2得点	F3得点	F4得点	F5得点	F6得点
上位(N=67)	3.48	3.61	3.35	4.09	4.72	3.48
中位(N=338)	2.85	3.09	3.68	3.89	4.51	3.41
下位(N=68)	2.59	2.78	3.89	3.92	4.43	3.06
有意確率	**	**	**	n.s.	**	**
多重比較(p<.05)	上>中>下	上>中>下	上<中<下	n.a.	上>中, 下	上, 中>下

** : p < .01 ; * : p < .05 ; n.s. : Not Significant ; n.a. : Not Applicable

て、一般的には、英語学習に積極的に取り組む学生は、それほど強い不安感やストレスを感じる事が少ないと言えるかもしれない。

(2) 研究課題2 (英語学習に対する意欲関心と専攻との関係) について

表3は、学生を専攻別(文系、理系、実技系)に分け、彼らの6つの因子に対する得点を分散分析した結果を示したものである。表で示されたように、因子1「授業外での積極性」、因子2「授業での積極性」、さらに因子3「英語学習に対する不安感」に関して、専攻による有意差が存在した。この3つの因子に関して、LSD法による多重比較を行ったところ、因子1と因子2については、いずれも文系学生の数値が理系や実技系の学生の数値を統計的に有意に上回る結果となった。したがって、文系の学生は、他の系列の学生と比較した場合、授業の内外においてより積極的に英語学習に取り組んでいると考えることができよう。

しかしその一方で、「学習不安」に関しては、文系学生の数値が実技系学生よりも有意に高かった。これは、表2に見られた成績上位者が示した傾向と異なるものである。表2に関連して、成績上位者は、一般に、「英語学習に対する積極姿勢」があり、「学習不安」を感じることは比較的少ない傾向にあることが示された。また本研究と同一の参加者を対象にして行った伊藤他(2004)の研究では、本学部の文系学生は、理系や実技系の学生よりも高い英語習熟度を有していることが明らかとなっている。では何故、文系の学生は、高い習熟度を持ち英語学習にも積極的な姿勢を持っているにもかかわらず、「学習不安」を多く感じているのであろうか。現時点では、その原因を特定することはできないが、可能性としては、文系学生の多くが、英語学習に真面目に取り組む、その真面目さゆえに却って不安やストレスを感じるというナイーブな性格の持ち主だと言えるかもしれない。いずれにしても、文系の学生が授業中の活動に関して高い学習不安を感じていることに、授業者は留意する必要がある。

次に、因子5「英語学習に対する関心」について見てみると、専攻による有意な差異は認められなかった。どのような専攻であれ、本学部生は英語学習に対してはかなり高い興味関心を持っているようである。また因子4と因子6の「英語学習の志向性」についても、専攻による差異は認められなかった。理系や実技系の学生については、英語学習に「単位の取得」や「就職での優位性」など「道具的志向性」をより求めるのではないかという予測もあったが、実際には、文系学生と同様に「異文化理解」や「他者とのコミュニケーション」という「統合的志向性」の数値の方が高かったことに留意すべきである。

表3 専攻による因子得点分散分析

	F 1 得点	F 2 得点	F 3 得点	F 4 得点	F 5 得点	F 6 得点
文系 (N=319)	2.95	3.16	3.67	3.84	4.54	3.33
理系 (N=192)	2.76	2.91	3.59	3.88	4.45	3.31
実技系 (N=103)	2.69	2.91	3.42	3.86	4.52	3.39
有意確率	**	**	*	n.s.	n.s.	n.s.
多重比較 (p.<.05)	文>理,実	文>理,実	文>実	n.a.	n.a.	n.a.

** : p. < .01 ; * : p. < .05 ; n.s. : Not Significant ; n.a. : Not Applicable

(3) 研究課題2 (英語学習に対する意欲関心と学年との関係) について

表4は、英語学習に対する意欲関心が学年の変化とともにどのように変化するかを示している。因子1や因子2の結果から明らかなように、学生の英語学習に対する積極的姿勢は、残念ながら学年を重ねるごとに低下しているようである。しかしながら、悲観的材料ばかりというわけでもない。因子5「英語学習に対する関心」については、4年生になってもさほど変化していない。少なくとも英語学習に対する高い関心を持っている限りは、周囲の環境整備や働きかけで「関心」が「学習意欲」へと転化することが期待できるであろう。

表4 学年による因子得点分散分析

	F 1 得点	F 2 得点	F 3 得点	F 4 得点	F 5 得点	F 6 得点
1年 (N=262)	2.94	3.25	3.77	3.99	4.55	3.40
2年 (N=211)	2.85	2.96	3.53	3.84	4.50	3.33
4年 (N=141)	2.68	2.79	3.40	3.62	4.43	3.20
有意確率	*	**	**	**	n.s.	*
多重比較 (p.<.05)	1年,2年> 4年	1年>2年, 4年	1年>2年, 4年	1年,2年> 4年	n.a.	1年>2年, 4年

** : p. < .01 ; * : p. < .05 ; n.s. : Not Significant ; n.a. : Not Applicable

(4) 専攻と学年の相互作用

ここまでの分析から、本学部生の英語学習に対する積極姿勢や関心は、学生の英語習熟度、専攻、学年などの要因によって異なることが明らかとなった。そこで、それらの分析において有意差を示した因子得点に関して、要因間の交互作用の有無を検証した。その結果、交互作用が認められたのは、因子1「授業外での英語学習に対する積極性」に関して「専攻」と「学年」という2つの要因間のみであった。図2は、2つの要因と因子1の得点の関係を示したものである。

この図において、注目すべきは、文系の学生の積極性が、2年次にいったん上昇したのち、4年次に向かって急激に下降していることである。先に述べたように、文系学生の特徴としては、習熟度が比較的高く、積極的学習姿勢を持っている一方で、学習活動の中に少なからぬ不安とストレスを感じるナイーブな性格の持ち主ということが挙げられる。このようなプロファイルを持った学生にとっては、強いストレスを感じさせることのない英語の授業を数多く提供することが、英語力の向上に有効であると考えられる。このような意味において、学習意欲が高まっている2年次を終了したのち、3年次や4年次において英語の授業が全く開講されていないという本学部の現状は、歓迎すべきものではないであろう。このような状況が、彼らの英語に接する絶対量を低下させ、それに伴って積極的学習姿勢も減少させる結果となったのではないだろうか。

一方、理系や実技系の学生の傾向は、文系学生とは全く異なるものであることにも注目する必要がある。彼らの学習意欲は、2年次において急激に低下し、その後4年次においては若干上昇に転じている。彼らは、文系学生と比較すると、一般的に、習熟度が低く、英語学習に対する積極姿勢（特に授業内の積極性）も高いものとは言えない。彼らが、英語の授業を受講している2年生の段階で、英語学習に対する積極性を失いつつあるという現状は、非常に憂慮すべき事実である。彼らの英語に対する学習意欲は、4年次に上昇に転じる気配を見せているが、これは、4年に進級し、卒業後の進路を真剣に考える時期に至り、自らの英語力や英語学習のあり方をもう一度考え始めたことによるのではないだろうか。

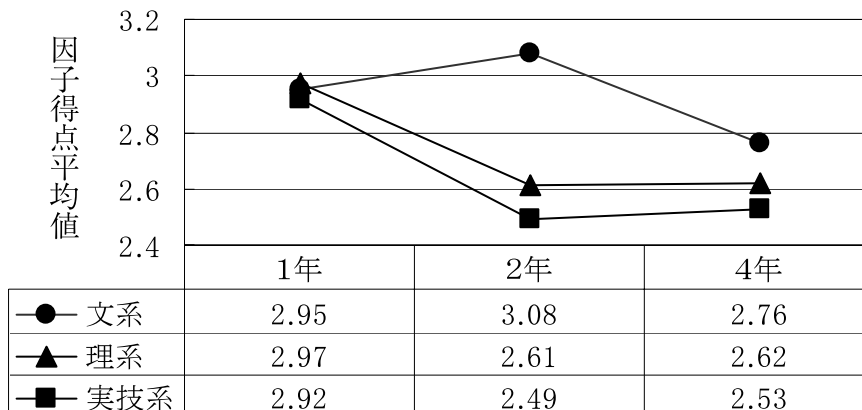


図2 因子1得点における専攻と学年の相互作用

2. 面接調査の結果と分析

前節においては、質問紙調査によるデータを分析し、いくつか興味深い事実が明らかとなった。しかし、そこで明らかとなった本学部生の英語学習に対する意欲や関心の変化をもたらしている原因については、合理的に判断するための材料が不足していた。そこで本項では、面接調査によって得られた質的データを分析することにより、本学部生が、岐阜大学の英語の授業に対してどのように感じ、どのように評価しているかを検証し、彼らの学習意欲や関心の変化をもたらしている原因の一端を明らかにしたい。

2.1. 英語の授業に関する結果と分析

先の「123 手順」において述べたように、この面接調査においては、専攻ごと(文系、理系、実技系)に無作為に選んだ学生約35名に調査用紙に沿って、聞き取り調査を実施した。学生たちの生の意見やコメント(資料3を参照)を、(1)授業内容、(2)学習意欲、(3)学習への関心、(4)学習理由と意欲・関心の変化に関しての4つの観点にまとめて整理し、それらについて分析を加えることで、本学部生が、岐阜大学の英語の授業をどのように評価しているのか、彼等の英語を学習する意欲や関心はどのあたりあるのか、あるいはさらにその意欲や関心がどのように変化するかを明らかにしたい。以下、それぞれの観点ごとに、学生のコメントをいくつか紹介しつつ、分析を加えていく。

(1) 授業内容に関して

【学生のコメント】

- [1]- 「オールイングリッシュの授業を受けることができてよかった」/「ネイティブの先生による授業が、日常的ないろいろなシチュエーションにもとづいておこなわれた会話の授業だったので、実践的な英語が身についた」。
- [1]- 「高校と変わらないレベルの授業があるので、そうした授業はレベルを上げて欲しい」/[私の受けた授業は高校の英語の繰り返しだったので、つまらなかった」。
- [1]- 英語の授業で、古事記をずっと訳すだけの授業があって、それがちょっとやる気なかった。
- [1]- 英語の授業で、いろいろな国の映画を教材としてあつかった授業であったが、語学の授業というより内容的には社会に近い授業になってしまったので、(社会の勉強にはなったが)もう少し語学の授業であることを基本にして欲しかった。
- [1]- ネイティブの授業で、英語を全然やっていない。ビデオ、新聞記事をみてスピーチ(どちらも英語を用いず、日本語)をするだけだった。
- [1]- 「英字新聞を教材に使った授業が面白かった」/「英語の歌をあつかう授業がいい」/「TOEIC関係の授業があれば受けてみたい」。
- [1]- 自分の専門に関係した内容を授業でやるのはいいと思う。
- [1]- 「学生のレベルに合せた授業があったらいい」/「必修の授業じゃなくて、希望者して受けれる授業だったらいい」/「選択性にして欲しかった。オーラルとか、リーディングとか(論文を読むための英語など)」/「3・4年でも英語の授業があったらいいとおもう」。

【分 析】

本学部生が、岐阜大学の英語の授業に対してどのような評価を下しているか、その実態を総括すると、内容面については、コメント[1]- から にあるように、コミュニケーション主体の実践的な英語運用能力を高める授業が圧倒的に人気が高い。これに比して、「リーディングの授業」は、おしなべて、内容というより、その授業自体が敬遠される傾向にあり、人気は低い。ただ細かく見てみると、レベルの低いもの、題材が偏りのあるもの、語学の授業であることが基本にない中途半端な授業、英語のコミュニケーション授業でありながら日本語の授業に終始するもの、などは別として、「英字新聞」、「英語の歌」、「TOEIC

関係」など、自分たちの興味・関心にみあう題材を取り上げたもの、あるいは、「専門の授業」に関連するようなものなどは、好意的に受け止められている。

授業の形態面については、コメント[1]-にあるように、大学の英語授業全体について、「学生のレベルに合わせた授業」、「オーラルとかリーディングとか、希望して受けられる授業」など、いわゆる能力別、選択制導入の希望がことに強かった。また、学部では3・4年次の英語の授業継続希望もあり、全体として、現行の履修形態の改革を求める声が強いのが目された。

(2) 学習意欲について

【学生のコメント】

- [2]- 一生懸命にやらなくてはならないじきがあり、そのときちゃんと勉強したら、語学力が付いたと思えた。
- [2]- 「英語を勉強したいとは思わないが、しなければならぬと思う」/「英語は学びたいというより、学ばなければと思っている」。
- [2]- 「将来先生になって小学校で英語やれって言われたら困ってしまう」/「将来教員になった場合、小学校で総合英語が必要となるので身につけなければならぬと思っている」。
- [2]- 「1・2年のときよりも、今のほうが英語を勉強しなきゃいけないって気持ち強くなっている感じがする」/「英語の授業が無くなって逆によけいな勉強しなきゃいけないって気がしている」。
- [2]- 英語は、大学3年間で、1コマでも、ずっとあって欲しい。
- [2]- 3年で英語の授業があったら取るかもしれない。

【分 析】

本学部生の学習意欲については、先の「1.3.2 研究課題の分析」の質問用紙による調査から、英語学習の関心は高いものの(コメント[2]-),実際の英語学習行動に対する積極性には欠ける傾向にある点が判明した。このことは、本面接調査でも、コメント[2]-にはっきりと現れた。先の分析で、学生の英語学習に対する積極性は学年を重ねるごとに低下する点が指摘されたのも、このあたりの消極的な認識を反映した結果であろう。

しかしその一方、ここで注意したいのは、本学部生の場合、英語は好き嫌いにかかわらず、「学ばなければならぬ」という自覚は全体的に高いことである。その大きな理由は、コメント[2]-に端的に示されているように、教育学部の学生ならではの声に集約されている。将来の教員生活に英語が必要となる。こうした認識は、学習意欲としては、自発的なものではなく、必要にかられたものであるために、授業外での継続的な学習活動やより高いレベルの習熟度に向けた学習活動に結びつけていくのは容易ではない。しかし、1・2年次で「英語の授業」が終了してしまう現在の英語教育のありように対して、今回の調査でも、コメント[2]-, , にあるように、「不満」や「不安」の声があったことを考えると、理由・背景はどうかあれ、本学部生の「英語を学ばなければならぬ」という認識自体は、「英語を学びたい」という積極的な意欲とも結びついている。その意味では、卒業時まで、英語学習に対する学生の自覚を継続し、学習意欲を喚起していく上では重要な意味をもつと思われる。

学生の「英語を学びたい」という意欲をどう吸い上げ、その英語力をいかに伸ばして行くか、英語に接する期間の継続性、さらには「絶対量」の問題も含め、今後の本学部にける英語教育の大きな課題である。

(3) 学習への関心について

【学生のコメント】

- [3]- 「オールイングリッシュの授業を受けることができてよかった」/「ネイティブの先生による授業が、日常的ないろいろなシチュエーションにもとづいておこなわれた会話の授業だったので、実践的な英語が身についた」²⁾。
- [3]- 「英字新聞を教材に使った授業が面白かった」/「英語の歌をあつかう授業がいい」/「TOEIC

関係の授業があれば受けてみたい。」

- [3]- 「高校と変わらないレベルの授業があるので、そうした授業はレベルを上げて欲しい」/[私の受けた授業は高校の英語の繰り返しだったので、つまらなかった。]
- [3]- 「学生のレベルに合せた授業があったらいい」/「必修の授業じゃなくて、希望者して受けれる授業だったらいい」/「選択性にして欲しかった。オーラルとか、リーディングとか(論文を読むための英語など)」/「3・4年でも英語の授業があったらいいとおもう。」
- [3]- 外国語コミュニケーションは、オーラルで、全共はリーディングでして欲しかった。

【分 析】

英語学習に対する関心は、一般的に、どのような「授業」を面白いと思うか、すなわち、英語の「授業評価」と裏表の関係にあると言ってよいだろう。本聞き取り調査においても、同じ結果が出ている。

英語を使ったコミュニケーション、会話の授業、ネイティブの先生の授業、日常生活に応用できる英語など、いわゆる「使える英語」あるいは実用中心主義に立脚した授業に対する関心が圧倒的である(コメント[3]-)。リーディングの授業は、全共の英語が中心で、題材やレベル、教え方次第により、興味を引く例も学生からいくつか報告された。しかし、それはコメント[3]- にあるように、「新聞」、「音楽」、「TOEIC試験」などを題材としたものに限られ、ごく少数で学生の関心はほとんど無きに等しかった。「高校の繰り返し」という印象がぬぐえず、大学での新しい英語の授業を求める学生の期待には十分に答え得ていないのが実情のようである(コメント[3]-)。ただ、学部で英語の原書や文献を読む機会があると、リーディング能力が必要となり、コメント[3]- にあるように、学部の授業でのリーディングの授業の選択性や3・4年次履修の希望が出されたのは注目すべき点であった。

こうした学生の興味・関心の傾向を見ると、今後の英語の授業は、やはり、まず第一には、「聞く」、「話す」といった、音声面のコミュニケーション能力育成により力を注いでいかなければならないことがはっきりした。しかし、それと同時にリーディングの授業についても、題材やレベルを吟味する、あるいは専門との関連を密にするなどの努力を払い、全体としては、コメント[3]- にあるように、学生の多様なニーズにバランスよくこたえていくことが大切と思われる。

(4) 学習理由と意欲・関心の変化に関して

【学生のコメント】

- [4]- 一生懸命にやらなくてはならないじきがあり、そのときちゃんと勉強したら、語学力が付いたと思えた。³⁾
- [4]- 「1・2年のときよりも、今のほうが英語を勉強しなきゃいけないって気持ち強くなっている感じがする」/「英語の授業が無くなって逆によけいなしなきゃいけないって気がしている」
- [4]- 3年で英語の授業があったら取るかもしれない。
- [4]- 「英語を勉強したいとは思わないが、しなければならぬと思う」/「英語は学びたいというより、学ばなければと思っている。」
- [4]- 「学生のレベルに合せた授業があったらいい」/「必修の授業じゃなくて、希望者して受けれる授業だったらいい」/「選択性にして欲しかった。オーラルとか、リーディングとか(論文を読むための英語など)」/「3・4年でも英語の授業があったらいいとおもう。」
- [4]- 外国語コミュニケーションは、オーラルで、全共はリーディングでして欲しかった。
- [4]- 2年でおわったという感じじゃなくて、4年くらいになると就職なんかで、英語勉強しなきゃいけないって感じがする。
- [4]- 将来、仕事で英語は必要になると思う。

【分 析】

「132.(2) 研究課題2」において、本学部生の英語学習の関心は、専攻(文系、理系、実技系)には

かわりなく、4年間を通じて、同じようになり高いレベルにある点が明らかにされた。一方、英語学習に対する意欲については、「132 研究課題の分析(4)専攻と学生の相互作用」において、専攻により、1年次から4年次までの変化に相違があることが明らかとなった。

こうした点について、今回の「聞き取り調査」の結果と照らし合わせてみると(「聞き取り調査」の方は3年生を調査の対象とし、その1・2年次を調査対象期間としたため)、単純な比較はできないが、英語学習の関心については、両方の調査において、本学部生はおおよそ高いレベルにあることが知られた。ただ、関心の中身については、「質問用紙調査」では、異文化理解や会話の授業など、「統合的志向性」が「単位の取得」、「就職での優位性」などの「道具的志向性」を上回っていた。

今回の「聞き取り調査」においても、前項「学習への関心について」で示したように、会話の授業、ネイティブの先生の授業、旅行等で応用できる英語訓練など、英語コミュニケーションへの統合的関心が高いことが認められた。ただし、ひとつ注目すべき点としては、「道具的志向性」に関しては、コメント[4]- から が、実はいずれも、理系・実技系の学生のコメントであり、コメント[4]- , にあるように、卒業が近づくにつれて高くなることであった。

2.2. 未修外国語に関する結果と分析

面接調査においては、英語の授業に対しての質問に加えて、未修外国語に関しても同様の質問を試みた。本学の未修外国語科目の開設状況については、前回報告で簡単に紹介した。1年次における全学共通教育の未修外国語科目ではドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・ポルトガル語の5言語であるのに対して、2年次における教育学部の英語以外の外国語コミュニケーション科目ではロシア語を除く4言語が選択可能である。(伊藤他(2004) pp.154-156 参照)

ここでは前項の英語と同様に、学生たちの生の意見・コメントを、(1)授業内容、(2)学習意欲、(3)学習への関心、(4)学習理由の4つの観点にまとめて整理し、それらについて分析を加えることで、本学部生が、岐阜大学の英語以外の外国語授業をどのように評価しているのか、また英語以外の外国語を学習する意欲や関心はどのあたりに存在するのかを明らかにしたい。それぞれの観点ごとに、まず学生のコメントを若干数紹介し、その後それらに対しての私たちの分析を付す形式で以下に記す。なお、未修外国語に関する学生のコメントのすべてについては、《資料4》を参照されたい。

(1) 授業内容に関して

【学生のコメント】

- [1]- ドイツ語を履修。後学期はネイティブの先生を取ったが、書くことも読むことも、更にはゲームもしたし、ということで積極的に取り組めた。いろいろなところで評価もされて、楽しんでやることができた。
- [1]- 私はフランス語を選択した。日本人の先生とフランス人の先生を選べたので、フランス人の先生のクラスに参加した。実践的な会話をやるはずだったのに、自己紹介レベルに留まり、実践的なコミュニケーションにはほど遠いものだった。上達のためには文法構造も習いたかったが、それはできなかった。フランス語で何を勉強したのか思い出せない。授業での活動はMy Wayは元はフランスの歌だからということで、フランス語で歌う練習をした。その歌を学期末にテープに吹き込んだもので成績の評価がなされた。歌詞にカナをふったが、それはフランス語ではないと先生に言われ、自分で何をしていたのか理解できない。
- [1]- 私は中国語を履修した。中国の映画を見せてもらったり、教科書に出てくる地名に関して説明してもらったり、いろいろ中国のことを知ることができて良かった。文法や単語の学習も、もともと漢文が好きだったので苦にならず楽しく学べた。さっき英語で文法や単語をやるのは高校の繰り返しでつまらなかったと言ったが、中国語は別である。英語を話すことにはさして興味はないが、中国語はぜひ話せるようになりたい。

【分 析】

概ね学生たちは未修外国語科目の授業内容については満足しているように思われる(コメント[1]- , [1]- 参照)。ひとつには新しい外国語を学ぶということそれ自体に興味・関心を持っていること, また日本とは異なった文化や社会を授業中に紹介してもらえることも, 学生たちの知的好奇心を満たしているように見受けられる。

そのように授業内容に関しては満足を示しながらも, 一方では学生たちの学習に対する安易な姿勢も見逃すことはできない。一般的に日本人にとって外国語の発音を習得することは困難を伴う場合が多く, 学習の初期段階ではどうしても発音指導に重点が置かれることになる。さらに内容のあるコミュニケーションを行うには, ある程度の文法を踏まえた上での総合的な外国語運用力を持ち合わせないとうまくできない, ということを手で理解しているものの, それを実現するための努力を払うことを厭わない, とまではいっていないのが多くの学生に共通する傾向のようである。

教員側の問題点としては, 1年次の全学共通教育の未修外国語科目から2年次の教育学部での外国語コミュニケーションの授業への接続が必ずしも円滑に行われていないこと, またネイティブの教員の場合に日本語力の問題から学生との意思疎通が欠けている場合もある(コメント[1]- 参照)。1年次から2年次への接続に関しては, 1年次において複数のクラスに分かれていた学生たちが2年次では言語ごとに同じ1つのクラスに編成されることから, 完全な解決法は見出せない。2年次の担当教員が受講者個々のレベルを見極めながら, 当初は各個人に適した指導を行い, 徐々にクラス全体をまとめて授業を進めていくしかないであろう。ネイティブの教員の日本語力の問題については, 外国語学習の場合には目標(学習)言語のみを用いて行われる教授法も有効であり(当該言語が話されている国・地域で行われている授業はほぼ例外なく目標言語のみで実施されているし, 日本の英会話学校等においても英語のみを用いた授業が売りになっている), これは学生側の意識改革と, 教員側での学生のフラストレーションを理解するという相互の歩み寄りで解決されることであろう(コメント[1]- 参照)。

(2) 学習意欲に関して

【学生のコメント】

- [2]- フランス語を通年で履修し, 同じ先生で同じメンバーの少人数クラスであったので, 先生と学生 学生同士互いに気心が知れて勉強しやすかった。前期は主としてフランス語の文法を学び, 後期にはフランスの文化についても学ぶことができた。全学共通でもフランス語をとったが, 1年間2コマだけの授業では文法面, 文化面いずれにしても不十分だった。その不足分を補う意味において, 2年で外国語コミュニケーションのフランス語の授業があったのは, 全学共通とは異なり少人数クラスの行き届いた授業だったこともあり, 助かった。
- [2]- スタートが一緒なので, 興味があった。アルファベットから勉強できた。
- [2]- フランス語で, 授業は楽しかったが, 全然分からなくて, 意欲がなくなってしまった。英語の他にしゃべるなら, フランス語がいいと思ってとったが, 自分で全然勉強せず, 身につかなかった。

【分 析】

学習意欲に関しては英語の場合と明らかに異なる条件が未修外国語には備わっている。つまりほとんど全員が大学入学後にゼロ地点から新しい外国語の学習を始めるということで, その言語に関する優越・劣等意識が存在しないことである(コメント[2]- 参照)。またクラスサイズも全学共通教育, 教育学部の両方において英語クラスよりは少人数が実現されていて, しかも外国語コミュニケーションの場合には1年(2学期)間にわたって同一の教員が授業を担当している。また2年次に外国語コミュニケーションとして英語以外の言語を選択するにはそれなりの積極的な動機付けが存在するであろうことも想像できる。したがって英語クラスよりも小さなクラスサイズで同じ先生から習うこと, 履修者のほとんどが積極的に学ぶ姿勢を持っていること等が, プラスの学習意欲を引き起こす原因になっていると考えられる(コ

メント[2]- 参照)。

ただし、ここでも学生側に自学自習の姿勢が欠ける場合には授業から取り残されていってしまいかねない。この点は教員が意識的に日常学習の重要性を強調して、学生たちの学習意欲を掘り起こす努力をなくてはならないだろう(コメント[2]- 参照)。

(3) 学習への関心に関して

【学生のコメント】

[3]- 英語以外にも他の外国語を学ぶ機会を持たせてことで、外国語の幅ができた。

[3]- 外国語の種類がもう少し多くても良い?(例えば、韓国語(近いから)。私立だと、種類がある。)

[3]- 興味があるのとないのとでは全然違います。中国語の辞書は結構引いて勉強しました。

【分 析】

英語以外の外国語を学習することへの関心は低くはない(コメント[3]- 参照)。この部分に関するコメント数は今回調査ではそれほど多くはないのであるが、発言した学生たちは新しい外国語を学ぶことを積極的に捉えているようである。そして実際に、興味・関心を持つことができた学生は積極的に学習に取り組んだことが想像できる(コメント[3]- 参照)。

制度上の問題点の指摘として、選択できる言語の問題と、全学共通教育での外国語選択の時期への不満がある(コメント[3]- 参照)。どの外国語科目を設置するかは簡単には結論は出せないであろうが、これについては全学共通教育でも、教育学部でも議論を深めていく必要がある。入学直後のオリエンテーションにおける外国語選択も現行制度では時期的に変更が困難である。シラバスに掲載される情報以外にも何らかの形で学生たちに各言語の情報をさらに提供する方策を工夫しなくてはならない。

(4) 学習理由に関して

【学生のコメント】

[4]- 日本の学校でも、スペイン語、韓国語、ポルトガル語、中国語を話す子供がいるので、これらの言語が選択肢の中にあっても良い。

[4]- いつかフランスへ行ってみたいと思ったので。

[4]- フランスに行ってみたくて、フランス語をとった。NHKの講座をやってみたが、分からなくなつて、止めた。授業は、楽しかった。その後は、止めた。

【分 析】

未修外国語の学習理由は素朴にその言語が話されている地域への憧憬、興味等がまず挙げられる(コメント[4]- , [4]- 参照)。また、それとともに言語を(教員として)職業上活用できる道具的手段として捉えている場合もある(コメント[4]- 参照)。英語が今やいわゆる英語圏の言語である以上に地理的にも文化的にも拡散し、また情報発信の手段としての活用が今日の日本社会で期待されている現在、グローバルな視点から、ある地域・国家の個別言語を学習することは異文化理解の観点からも大いに意義があると考えられる。

日本も多文化社会へ移行しつつあることは確実であり、そういう状況は学校現場における多国籍の子どもたちの存在によっても顕在化している。こうした中で、言語(外国語)学習に伴う様々な困難を学生時代に自ら体験しておくことは、そうした異文化の環境で生きていく子どもたちへの共感を生み、教育学部の学生たちが将来教員として働く場合にもプラスの影響を与えることになるであろう(コメント[4]- 参照)。

英語は中学校(あるいはそれ以前)から当たり前のこととして学習を開始し、その学習の全員に共通する大きな理由のひとつが受験であるとするならば、未修外国語の学習は受験とは無縁であり、自分の希望

に応じて選択した言語を自覚的に学習できる,異文化への素朴で純粋な興味・関心を呼び覚ますことのできる貴重な機会を提供していると言えよう。

これまで検討してきた,(1)授業内容,(2)学習意欲,(3)学習への関心,(4)学習理由の各観点ごとにそれぞれに固有の問題を述べてきたが,学生のコメントには共通して自ら学ぶことを放棄する傾向も見て取ることができる。外国語学習の初期にあっては,学習者の興味・関心が強いので学習も円滑に進めることができるが,次第に学習事項も難度が上がり,動機付けが弱い場合には学習を継続することが困難になる。本学の提供する未修外国語科目の授業は量的には最低水準のものであり,学習意欲の高い学生たちの期待に応えることができていない。

教育学部の生涯教育講座・生涯教育課程では3年次用の科目として「国際コミュニケーション演習C・D」をドイツ語・フランス語・中国語・ポルトガル語で開講してきた。今年度後学期を例にすれば,2年次用の基礎科目「外国語コミュニケーション」の英語以外の外国語の受講者総数は50名近いのに対して,3年次用「国際コミュニケーション演習」には4言語を合計しても10名に満たない学生しか履修しない結果になっている。

教育学部の3年生はカリキュラムが詰まっていることで,他の講座・課程の開講科目を履修しにくいという事情があるにせよ,継続して3年次まで未修外国語の授業を履修しようとする学生は極めて少数であることは,必修科目と選択科目の違いを度外視したとしても,外国語に対して興味・関心はあるものの学習を継続する動機には欠けるということを示しているのであろうか。2年次までの未修外国語授業について学生たちが概ね満足しているだけに,動機付けが強化されるように指導すること,ならびに,さらに上級レベルの語学力を身につけようとしている学生が受講しやすい環境を作ることが今後求められてくるであろう。

3. 考察と示唆

本調査によって得られた量的データ及び質的データの分析結果に基づいて,これらのデータが本学における語学教育の現状に対して,あるいは今後の在り方に関して,どのような示唆を与えているのかを総括することにしたい。以下,(1)英語学習に対する興味関心と学習意欲とのギャップ,(2)本学の語学の授業が抱える問題点,(3)情意的側面から見た語学教育の改善の方向性,という3点に注目し順次述べることにする。

3.1. 語学学習に対する興味関心と学習意欲とのギャップについて

質問紙調査による量的分析においても,面接によって得られた質的分析においても,本学部生は語学学習(特に英語学習)に対して,その学習理由は個人により異なっているとしても,かなり高い興味関心を持っていることが示された。しかし,その一方で,多くの学生にとって,語学の学習に対する高い関心が,具体的な学習活動に結びついていない状況も明らかとなった。

何故,このように興味関心の高さと低調な学習活動との間の落差が生じているのだろうか。面接調査で得られたデータを見る限りでは,本学で開講されている語学の授業が必ずしも学習者のニーズに応えた内容とはなっていない状況が読み取れる。もちろん,学生が望む授業が必ずしも望ましい授業であるとは限らない。指導する側が,望む学生像やその教育目標を明確にした上で,信念と自信を持って指導にあたるのが,最も大切なことであろう。したがって,教師が自らの教育理念や信念に従って真摯に行う授業は,例え,その内容が学習者のニーズに合致していなくとも,学生に不満を感じさせることはないだろう。実際,面接調査の結果に示されたように,授業が,オーラル・コミュニケーションをほとんど伴わない学生にとって一般的には人気の低い読解中心のものであっても,その内容が充分吟味され,興行きのあるものであるならば,学生は満足し得るという事実も明らかとなっている。

しかしながら,指導する側が学生のニーズに無頓着でいることは,やはり望ましい姿ではない。少なく

とも、授業者は、学習者のニーズや希望を理解した上で、授業内容がそれらにそぐわない場合は、授業の意義を説明し納得してもらうことが必要であろう。どんなに優れた内容であったとしても、全ての学習者に等しく効果を発揮する教授法は存在しない(Richards & Rodgers, 2001)。したがって、授業者が自らの理念・信念に従って自信を持って授業を行ったとしても、学習者の受け止め方にも配慮する謙虚かつ真摯な姿勢を忘れてはならないだろう。言語教育の基本的パラダイムが、単なる知識の伝達から協同作業による新たな知の構築へと変化する状況の中において(佐藤, 1996), このような姿勢は今まで以上に重要な意味を持つことであろう。授業者がこのような姿勢で継続的な指導を行なっていくならば、例えば、学習者が望むオーセンティックなコミュニケーション活動を授業の中に取り入れる工夫をするならば、本調査で示された本学部生の英語学習に対する高い興味関心は、自ずと具体的な学習活動へと姿を変えていくのではないだろうか。

3.2. 本学の語学の授業が抱える問題点について

前項で指摘した学生のニーズと授業内容のズレという問題以外にも、本調査で得られたデータの分析から、本学が開講している語学の授業に関して、以下のような潜在的、あるいは顕在化した問題点が浮き彫りとなったように思われる。それらの問題点は、授業の内容や指導法などソフト面に関する問題と学習環境を含めたハード面に分類することが可能である。以下その両面について、順次考察することにする。

3.2.1. ソフト面に関する問題点

教授内容や指導法など授業のソフト面に関して、前項で述べた調査結果において最初に目を引くことは、同一科目であっても授業者によって、驚くほどの多様性が存在していることである。具体的に、全学共通科目の英語Aを例に取ることにしよう。岐阜大学の公式サイトで公表されているシラバスによると、英語Aの「授業のねらい」は、「基礎的なコミュニケーション能力(読む, 聞く, 話す, 書く)をできるかぎりバランスよく育成することを目標とした授業です。」とある。それ以外の内容については、全て担当教員にゆだねられている。この事実を了解すれば、およそ共通シラバスの下に開講されている授業とは思えないほど、授業者によってその内容や指導方法に違いが存在することは、驚くことではないかもしれない。いや寧ろ、英語Aに関しては共通シラバスなど存在していないと解釈する方が適切であるかもしれない。いずれにしても、このような同一科目における多様性が、必ずしも好ましい結果を生み出していないという現実を直視する必要があるだろう。

ソフト面に関する第二の問題点と思われるのは、科目間の有機的つながりが希薄であるという点である。例えば、ある理系の学生は「全学共通と外国語コミュニケーションでは担当の先生が変わってしまうので、先生が学生の能力を把握できていない点や、前の先生のおしえ方・教材等とのへだたりがあり、あまりスムーズな連結はなかった」と率直な意見を述べている。科目間の連携の問題は、全学共通と専門基礎としての語学教育の間だけでなく、全学共通における、英語A1, 英語A2, 英語Bの間の連携についても同様である。極端な場合、学年を重ねるごとに、受講する内容が平易なものとなり、学生にとってほとんど知的好奇心を満足させることがないというケースも生じてしまう。この異なる科目間における連携の不備は、先に指摘した同一科目としての統一性の不足という問題と密接な関わりを持っている。すなわち、授業者に授業に関するほとんど全ての裁量が委ねられ、しかも担当以外の授業の中身を共有するシステムが存在しない状況においては、科目間の有機的連携は望むよしもないというのが実情であると考えられる。

3.2.2. ハード面に関する問題点

本研究における面接調査においては、前項で述べたソフト面での問題点の指摘に比べて、教室環境やクラスにおける学生数など学習環境を含めたハード面での指摘はかなり少なかったと言える。「オーラルコミュニケーション中心の授業は、もっと少人数で受講したい」という趣旨の意見は一部に見られたが、少数の意見にとどまり、学生の関心は、学習環境よりも学習の中身に向けられていると言って良いだろう。

しかしながら、ハード面に学習が履修可能な科目数も含めるならば、多くの学生は現状を好ましく受け

止めていないようである。この点に関して、面接調査においては、3・4年次における語学の授業（選択科目）の開設を希望する声が多く出された。また質問紙調査における分析でも、理系や実技系の学生の英語の授業に対する学習意欲は高まっていることが示された（図2参照）。彼らは、就職を見据えて、英語の授業が無いことに不安を感じ、そうした不安感が英語に対する学習意欲へと転化したと解釈することが可能だろう。一方、学習意欲が2年次に比べて減少する結果となった文系学生についても、彼らの英語に対する学習意欲は理系や実技系と比べて決して低いものではない。英語学習に真面目に取り組む特性を一般に持っていると思われる文系学生にとっては、授業を受ける機会を増やすことが意欲の向上につながることであろう。

3.3. 情意的側面から見た語学教育改善の方向性について

ここまで、学習者の「やる気」という動機付けを中心とした情意的側面から、本学部の語学教育の現状を分析し考察してきた。前項においても、これまでの議論で既に明らかとなったいくつかの問題点に即して、改善のための方策についても随時触れたが、本項では、語学教育改善の方向性について総括する。

「やる気」の問題は、いかなる学習活動においても成功のための鍵となる要因であろう。また現行の学習指導要領において重視されている「新しい学力観」⁴においては、学習者の関心・意欲・態度が、従来以上に大切な役割を果たすと考えられている。一般的に、語学学習において、学習者の「やる気」を向上させるためには、次のような3つの視点が重要である。

第一の視点は、一方的に知識を受け取るだけの授業よりも、お互いの持つ情報や考えを伝え合うコミュニケーション活動が、学習者に興味を持たせ喜びを引き出す言語活動になるということである（McNamara, 1973）。第二の視点は、教材などを教師が全て決定するのではなく、何をどのように学ぶかの意思決定に学習者を少しでも参加させることが、彼らの興味関心を高める重要な要素であるということである（Dickinson, 1987）。第三の視点は、学習者にとって難しすぎず易し過ぎず、適度な難易度を持った課題を与えることが、達成時の喜びを増すということである（Crookes & Schmidt, 1991）。

この授業改善の3つの視点は、実は、本研究によって明らかとなった本学学部生の語学授業に対する意識調査の分析結果とも符合するところが大きい。すなわち、第一の視点は、「オーセンティックなコミュニケーション活動」を積極的に取り入れた授業の提供であり、第二の視点は、「学習者の自由意志」を尊重した数多くの選択クラスの提供であり、第三の視点は、「チャレンジングな授業内容」を提供するための、科目間に有機的連携の整備である。今後、このような視点、方向性に十分に留意した、スピーディな語学教育改善のための真摯な努力が求められているといふ。我々筆者についても、語学教育の一翼を担うものとして、その努力の輪に積極的に加わっていく責務があることは言うまでもないことである。

4. さいごに

本研究の目的は、伊藤他（2004）と合わせて、英語を中心とした本学部の語学教育に関する実態を分析・整理することにより、授業改善に資するデータを提供することであった。この2つの研究により、学習者に焦点を当てた、多様なデータ（習熟度、意欲・関心の分析、また授業評価に対する分析）は、かなり整理できたと思われる。しかしながら、実態の把握が学習者に関してのみで止まり、カリキュラムを構成し、実際に授業を行う語学担当教員や、各学部においてそれぞれの専門教育を担当している非語学担当教員について、何の調査もなされないということであれば、真に効果的な改善は望めないのではないだろうか。授業を提供し、教育に責任を持つ教員は、語学教育に対してどのような理念や希望を持っているだろうか。学習者を含めた、三者の考え方が、大枠において同一の方向を向き、協同的な学習・教育活動が展開されたときにこそ、語学教育の実が上がることだろう。このような意味において、次年度では、語学教育に関する教員の意識をテーマとした研究調査を行い、具体的かつ実践的な改革プログラム試案を提示することを目指したい。

注

- 1) 本研究は、筆者4人が共同して行ったもので、本稿の執筆に際しても4人が同等の責任と役割を担っている。
- 2) 学生のコメントによるコメントが、同時に意欲、関心など異なるいくつかの観点に関連すると思われる場合がある。そのような場合、同一のコメントが、異なる観点に関するコメントとして提示されている。
- 3) 学生のコメントによるコメントが、同時に意欲、関心など異なるいくつかの観点に関連すると思われる場合がある。そのような場合、同一のコメントが、異なる観点に関するコメントとして提示されている。
- 4) 教師主導による知識や技能の教え込み、伝達中心の学習指導に代わって、これからの教育においては、生涯にわたって主体的に学び続ける関心、意欲、態度、自己学習能力を重視し、一人一人の可能性を伸ばすための評価のあり方を目指すべきであるとする学力観である(佐藤, 1996; pp. 14 - 15)

参考文献

- Crookes, G. & Schmidt, R. (1991). Motivation: Reopening the Research Agenda. *Language Learning*, Vol. 41: 4, pp.469-512.
- Dickinson, L. (1987). *Self-instruction in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gardner, R. (1985). *Social psychology and second language learning: the role of attitude and motivation*. London: Edward Arnold.
- McNamara, J. (1973). Nurseries, Streets and Classrooms: Some Comparisons and Deductions. *The Modern Language Journal*, Vol. 57, pp. 250-55.
- Richards, J. C., & Rodgers, T. (2001). *Approaches and methods in language teaching*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 伊藤徳一郎, 伊東 英, 廣田則夫, 大和隆介 (2004) 「岐阜大学教育学部生の英語力に関する研究(1)」 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)第53巻1号, pp. 149 - 162 .
- 佐藤公治 (1996) 『認知心理学からみた読みの世界: 対話と協同的学習をめざして』東京: 北大路書房 .
- 岐阜大学全学共通教育委員会編 (2002) 『岐阜大学全学共通教育授業科目「学生による授業評価」報告書 平成12年度後学期・平成13年度前学期実施 』岐阜大学全学共通教育事務局発行

《資料 1》

英語学習に関するアンケート

学籍番号

このアンケートは、みなさんの英語学習に対する考えや学習方法について尋ねるものです。アンケートの結果は、みなさんの成績には関係しません。岐阜大学での英語の授業改善のために、大切な資料として使われますので正直に答えてください。

アンケートの答え方は、以下の質問項目を順番に読んで、あまり深く考えないで思いつくままに、最も当てはまる（あるいは賛成する）尺度を1つ選んで で囲んでください。

5 = あてはまる 4 = どちらかと言えばあてはまる 3 = どちらとも言えない
2 = どちらかと言えば当てはまらない 1 = 当てはまらない

アンケート項目に答える前に、以下の質問に答えてください。

岐阜大学は（ 前期日程 後期日程 ）で受験した（該当するものを で囲んでください）。
大学入試センター試験での英語の得点は（ /200 ）だった（点数を記入してください）。
前期日程を受験したみなさんに尋ねます。

前期日程では、英語を（ 受験した 受験しなかった ）（該当するものを で囲んでください）。

それでは以下の項目に順次答えてください。

Part 1

- | | | |
|----|--|-------------------|
| 1 | 英語の授業で学んだことについて積極的にしばしば考える | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 2 | 学校で英語を勉強するだけでなく、日常生活の中でできるだけ英語に接するようにする | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 3 | 英語の授業でわからないことがあれば、友達や先生に尋ねて教えてもらう | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 4 | 英語の宿題をするときは、注意深く考えしっかり理解しているか確認する | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 5 | 英語の勉強の仕方を振り返ると、本気で英語を学ぼうとしているといえる | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 6 | 英語の宿題が余分に出るとしたら、積極的にやる | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 7 | 英語の宿題が返されたら、やり直して間違いを訂正する | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 8 | 英語の授業では、質問に対して積極的に答えようとする | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 9 | テレビで英語の番組があれば、積極的に見るようにする | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 10 | ラジオなどで英語の歌を聞いているとき、注意深く聞いて英語の単語を聞き取ろうとする | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |

Part 2

- | | | |
|---|---|-------------------|
| 1 | 近所に英語を話す家庭があれば、彼らとできるだけ親しくなるようにする | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 2 | 授業以外で英語を使う機会があれば、たいてい英語を使い、日本語は必要なときだけ使うようにする | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 3 | 他の教科に比べて、英語が最も好きだ | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 4 | 学校に英語のクラブがあれば、積極的に参加する | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |

5	英語の授業が選択であってもその授業を受ける	5 - 4 - 3 - 2 - 1
6	英語の学習は面白い	5 - 4 - 3 - 2 - 1
7	テレビの英語の番組がある程度理解できれば、その番組をできるだけみる	5 - 4 - 3 - 2 - 1
8	英語の映画のチケットをもらったら、必ず観に行く	5 - 4 - 3 - 2 - 1
9	英語の授業では、できるだけ英語を使うようにする	5 - 4 - 3 - 2 - 1
10	時間と英語の知識があれば、できるだけ英語の雑誌や新聞を読む	5 - 4 - 3 - 2 - 1

Part 3

1	外国へ行く機会があれば、その国の言葉を話したいと思う	5 - 4 - 3 - 2 - 1
2	日本は外国人との直接の交流は比較的少ないが、日本人にとって外国語を学ぶことは重要だと思う	5 - 4 - 3 - 2 - 1
3	外国語が自由に話すことができたら良いと思う	5 - 4 - 3 - 2 - 1
4	外国文学は翻訳よりも原文で読みたいと思う	5 - 4 - 3 - 2 - 1
5	外国語を話す人たちと会って話を聞くのが楽しい	5 - 4 - 3 - 2 - 1

Part 4

1	英語学習が大切なのは、英語圏の人々とうまく付き合うことができるようになるからだ	5 - 4 - 3 - 2 - 1
2	英語学習が大切なのは、より多くの人たちと出会い、話ができるようになるからだ	5 - 4 - 3 - 2 - 1
3	英語学習が大切なのは、英語圏の人々をより深く理解することができるようになるからだ	5 - 4 - 3 - 2 - 1
4	英語学習が大切なのは、他の文化を持つ人々の活動に、より自由に参加することができるようになるからだ	5 - 4 - 3 - 2 - 1
5	英語を学習するのは、入試や単位を取るために必要だからだ	5 - 4 - 3 - 2 - 1
6	英語を学習するのは、英語が使えるれば沢山の知識を得やすくなるからだ	5 - 4 - 3 - 2 - 1
7	英語を学習するのは、将来の就職に役に立つからだ	5 - 4 - 3 - 2 - 1
8	英語を学習するのは、英語ができれば周囲の人から高く評価されるからだ	5 - 4 - 3 - 2 - 1

Part 5

1	英語の授業で自ら質問に答えるのは恥ずかしい	5 - 4 - 3 - 2 - 1
2	英語の授業中、自分の話す英語に自信が持てない	5 - 4 - 3 - 2 - 1
3	他の学生の方が、自分よりも英語を上手に話すと思う	5 - 4 - 3 - 2 - 1
4	授業で英語を話すとき、緊張してどぎまぎしてしまう	5 - 4 - 3 - 2 - 1
5	英語を話すとき、他の学生が私のことを笑うように思って不安だ	5 - 4 - 3 - 2 - 1

ご協力ありがとうございました。

教育学部外国語教員：伊藤 徳一郎、廣田 則夫、伊東 英、大和 隆介

《資料 2》

岐大の語学教育についての調査を行っています。これまで受講した語学の授業について、率直な意見・感想を聞かせてください。

講座 _____ 学年 _____

全学共通の英語の授業について

- | | | |
|---------------------------------|-----|----|
| Q: 選択の英語 B を受講しましたか。 | YES | NO |
| Q: 全学共通の英語の授業は、楽しかったですか。 | YES | NO |
| Q: 全学共通の英語の授業によって、英語の力は向上しましたか。 | YES | NO |

全学共通の未修外国語の授業について

- | | | |
|-------------------------------|------|------|
| Q: 未修外国語は、何語を受講しましたか。 _____ 語 | 1 コマ | 2 コマ |
| Q: 授業は、楽しかったですか。 | YES | NO |
| Q: 授業によって、語学力は向上しましたか。 | YES | NO |

外国語コミュニケーションの授業について

- | | | |
|------------------------|------|------|
| Q: 何語を受講しましたか。 _____ 語 | 1 コマ | 2 コマ |
| Q: 授業は、楽しかったですか。 | YES | NO |
| Q: 授業によって、語学力は向上しましたか。 | YES | NO |

その他の質問

- | | | |
|-----------------------------------|-----|----|
| Q: 1・2年に比べて、英語を学ぶ(使う)する時間は増えましたか。 | YES | NO |
| Q: 1・2年に比べて、英語を学ぶ(使う)意欲は高くなりましたか。 | YES | NO |
| Q: 1・2年と比べて、英語を学ぶ理由は変化しましたか。 | YES | NO |
| Q: 将来、仕事で英語は必要になると思いますか。 | YES | NO |
| Q: 教員志望ですか。 | YES | NO |

- Q: 全学共通の語学の授業で良かった点は何でしょうか。
- Q: 全学共通の語学の授業で改善すべき点は何でしょうか。
- Q: 外国語コミュニケーションの授業で良かった点はなんですか。
- Q: 外国語コミュニケーションの授業で改善すべき点はなんですか。

ご協力ありがとうございました。

《資料 3》

本学英語授業に対する教育学部学生の意見	
系	意見
文系	英語Bの方が良かった。後期が良かった。先生が新聞とか実用的なものをもってきて、難しくなくて、日常生活に使える英語を教えてくれた。
文系	後期はランダムであてられて、訳をするが、量が少ないので、前の日に1時間くらい予習した。
文系	楽しかった方の授業は、家庭学習を0-30分した。楽しくなかった方の授業は、ほとんどしなかった。(理由:その場で教材が渡されたので予習のしようがなかった。)
文系	最初の授業ガイダンスは、英語Bの方はあった。
文系	おもしろくない授業は、力がついたとは思わない。
文系	おもしろかった授業は、英語を読む力は、ついた。読んで楽しかったから。客観的(?)な英語が入った。知識には、なった。
文系	つまらなかつた方の授業の先生は、よく怒って、される。悪循環。予習をするような授業ではない。何にされているのか分からない。
文系	最初は、英語の教師になるためにただ英語にふれようと思っていたが、今は、質の高い教員になるために、いろいろ勉強しておいた方がよいと思うようになった。
文系	教員になるために、英語を選んだが、今は、自分が楽しめるから英語を勉強している。
文系	英語圏の人々ともっと仲良くなりたいたいという気持ちが強まった。
文系	英語を使ったコミュニケーションするときに、不安が少なくなった。
文系	外国人の先生と英語で話したかった。
文系	授業でやることを明確にして欲しい。
文系	時間通りに来て欲しい。
文系	自分の都合で、日にちを変えないで欲しい。
文系	全共の授業では、ニュース(CNN)を教材として使っていたのがユニークだったが、あまり面白くなかった。
文系	英語の授業は、ただ単にテストのために勉強して、それが終わると忘れてしまっうって感じてました。
文系	英語の授業の時のテストは、高校の時のテストと同じで代わり映えのしないものだった。
文系	授業の予習はしてなかったし、してなくてもそれで済む授業だった。

文系	授業の予習は、最初ちょっとしたけどすぐにしなくなかった。
文系	毎回会話を覚えてきて、授業でロールプレイ形式でそれを言ったら終わりという授業だった。
文系	現在(3年生)は英語を勉強する時間はゼロ。
文系	家庭教師で英語を教えているけど中学生なので勉強しなくともできる程度のことしかやっていない。
文系	英語をしゃべりたいという気はあるけど、時間がなくてまあいいかって感じてあきらめてます。
文系	洋楽はむちゃくちゃ聴きます。
文系	ダンスをやっているんで洋楽をよく聞くけど、メロディーだけ聞くかんじ。
文系	英語をちょっとがんばるって思ってるってTOEICの試験を受けたことがある。
文系	3年で英語の授業があつたら取るかも知れない。
文系	すごい理想でいえば、好きな音楽の歌詞なんかを訳す授業は受けない。
文系	会話主体の授業なら受けてみたい。
文系	英語を勉強する理由はやっぱりテストがあるからが一番大きい。
文系	もともと英語が好きだから英語を勉強するって面もあります。
文系	会話のテストはきつかった、会話を丸暗記するテストで暗記する分量が多くて困った。
文系	ずっとCDを流しっぱなしで、それを1時間半聞いておわりっていう授業があった。
文系	先生は全くとしゃべらなくて、CDを聞いてそれに応えるのがある意味面白かった。
文系	将来先生になって小学校で英語やれって言われたら困ってしまう。
文系	空港やレストラン等、実際の場面を想定した英語を学べて良かった。
文系	同じ授業だが、使える英語を学び、話すことが中心の授業だったのが良かった。
文系	いろんな時事問題の冊子を勉強した。ただ英語を勉強したのではなく、英語を通して何かを学ぶことができたのが良かった。
文系	私の受けた授業は高校の英語の繰り返しだったので、つまらなかった。
文系	オールイングリッシュの授業を受けることができたのは良かった。
文系	聞く英語を中心にできた。

文系	単位を落としたんだけど、何をやっているのか分からないままで、先生の説明も理解できなかった。場面を想定した会話も実際の場面では役立たなかった。
文系	授業の内容が会話なのに、試験はペーパーテストのみで、会話部分の評価もしてもらいなかった。
文系	(英語)外コミでもレストランの会話など実践的なものだった。
文系	小グループで会話の役割分担して前に出て発表する形式だった。少し面倒くさかったけど、やればできるといふ実感が持て、結構楽しかった。
文系	日本語で人前で話すのも恥ずかしいのに、英語で話すとなるともっとそうなのが普通なので、授業でそういう機会を作ってもらえたので、精神的にも強くなり、英語を話す力も付いた。
文系	会話にアレンジを加えても評価が高くなるわけでもなかったのが、やる気をやや萎えさせたところもあった。
文系	英語の授業で、新しいことは学ばなかった。高校と同じ内容。
文系	楽しかったけど、英語の勉強にはあまりならなかった。英語を使わなかった時間ばかりだった。
文系	新聞を読んで英語で自分の意見を発表するはずだったが、日本語でもいいということになり、結局すべてが日本語になってしまった。
文系	一生懸命にやらなくてはならない時期があり、そのときちゃんと勉強したら、語学力が付いたと思えた。
文系	ギリシア神話のマニアックな話で面白かった。自分の知らない世界や、セーラーマンの話などが出てきて内容が楽しかった。
文系	ネイティブの先生のクラスなのに、人数が多すぎて挙手もしにくいし、うまく話す機会が得られなかった。サイズは30~40人だった。
文系	英語のクラスは指定ではなく選択できるようにしてもらいたい。
文系	(3年次にも英語の授業があった方がいいと思う人はどれくらいかな?) 3人(8人中)
文系	文法よりも、自分で話すことを決めて、発表する形式の授業。自分で話したいことを話させてもらえる授業。
文系	全共でギリシア神話をやったが、途中で終わったので、その続きがやりたかった。
文系	私は内容はどんなものでも構わない。ただ、せっかくネイティブの先生についたのに、英語を学生が話す雰囲気クラスになく、もし英語で発言すれば何だアイツは、という感じになるのが嫌でした。
文系	英語Bのクラスが担当の先生によって内容や課題の分量、評価基準等が著しく違っているのが問題だと思う。
文系	受験の時の英語の力で読める程簡単で予習の必要がなかった。
文系	ネイティブの授業で、英語を全然やっていない。ビデオ、新聞記事を見て、スピーチ(どちらも英語を用いず、日本語)をするだけだった。
文系	しゃべることは、出来た。全共の読むばかりの授業よりは、しゃべることに慣れたかな。

文系	英語の学習時間は、増えた(2~3名)。論文を読む機会もあるし。しゃべれるようになりたいから、自分で本読んだりして、勉強している。
文系	英語の学習時間は、減った。意欲も減った。今は、英語を勉強するよりも、論文を書くための時間が必要。論文を読むためには、英語を使っている。
文系	卒論や授業に英語を使うことがある。
文系	余裕が出来たら、コミュニケーションの勉強をしたいが、今は、論文を読めるようになりたい。
文系	外国語コミュニケーションは、オーラルで、全共は、リーディングでして欲しかった。
文系	全教では、ひたすらリーディングだったが、向上とまでは思わなかった。が、高校の時の英語を忘れなかったという点では、良かったのかもれない。
文系	リーディングの授業でもいいのだが、高校の授業と、大学の授業とが、どう違うのか。もっと、内容理解からはいかなりリーディングをして欲しかった。
文系	リーディングの授業で、量をこなせるような読み方もして欲しかった。(量は、少なかった)
文系	選択にして欲しかった(全員):オーラルとか、リーディング(論文を読むための英語など)の中から。
文系	(皆の話を)聞いていると、先生によって、ずいぶん違うので、選択制にして欲しかった。
文系	英語Aは、ギリシャ神話で、英語Bは、「古事記」だった。同じようで、つまらなかった。
文系	2つしかない英語の授業が、月・火と続くので、つまらなかった。
文系	選べなかったので、評価についてあとで聞くと、不公平を感じる。(学科によって、毎年、同じ先生が担当する)
文系	コミュニケーション(オーラル)の授業の人数が少なくなって欲しい。(今は、40人 5~10人くらいだったら……)
文系	オーラルで、90分は長すぎる。(何をしても良くなってしまおう)
文系	英語は、大学3年間で、1コマでも、ずっとあって欲しい。(他大学では、そういうところもある)、未修外国語も、3年間ある。
理系	英語の勉強時間は、増えている。(留学して英語でメールを交換した)
理系	英語の勉強時間は、減っている。(3名)
理系	英語の勉強時間は、増えてもいいし、減ってもいい。(1名)
理系	勉強する時間はないが、使う機会は増えている。(1名)
理系	英語を勉強したいとは思わないが、しなければならぬと思う。(4名)

理系	将来、仕事で英語は必要になると思う(4名) 思わない(4名)
理系	高校と違い、授業が(前・後期とも)ネイティブの先生によりすべて英語で行われ緊張したが、その分集中して勉強したので英語力がついたと思う。
理系	大学の授業は、高校のやりかたと同じではなく、いろいろな特徴を出して欲しい。
理系	クラスサイズは現在の40人程度で、特に問題はないが、会話の授業がより効率的に行われる人数の工夫は必要と思われる。
理系	ネイティブの先生による英語の授業が、日常的ないろいろなシチュエーションにもとづいて行われた会話の授業だったので、実践的な英語が身についた。
理系	英語の授業で、いろいろな国の映画を教材としてあつかった授業だったが語学の授業というより内容的には社会に近い授業になってしまったので(社会の勉強にはなかったが)、もう少し語学の授業であることを基本にして欲しい。
理系	大学での授業で、英語力は高校の時期待っていたより身についたと思う。(2名)
理系	大学の授業では、英語力を高校の時と比べて向上していない。(2名)
理系	3年次以降に外国語の授業を履修することについては、内容次第であり、会話の授業が望ましい。
理系	大学の外国語の授業は、学生の興味・関心・能力に応じた選択性にして欲しい。
理系	1・2年に比べて、英語を学ぶ(使う)時間は授業でたまたま簡単な英語の文献を調べる以外、英語を学ぶ時間も使う時間も増えない(と)うよりも皆無に近い。
理系	英語は学びたいというより、学ばなければならないと思っている。
理系	英語は苦手でできれば勉強したくはないが、将来教員になった場合、小学校で総合学習等で必要となるので、身につけなければならないと思うている。
理系	本来英語が苦手で、高校の時は、大学受験のための英語を勉強し、大学入学後も英語を勉強する目的がはっきりしなかったが、教育実習等を経験し英語を身につける必要性を痛感した。
理系	日常生活のいろいろな場面(バスの乗り方、電話の応答等)に応じた会話の授業が新鮮で面白く、身についた。
理系	英字新聞を教材に使った授業が面白かった。
理系	日常使える英語を教えてもらい、旅行等で応用できると思われるのでためになった。
理系	高校と変らないレベルの授業があるので、そうした授業についてはレベルを上げて欲しい。
理系	複数講座の混成クラス(たとえば英語と家政のクラス等)は、学生の意識も能力も異なるので考えて欲しい。なるべく講座別の単一クラス編成にして欲しい。

理系	<p>通年クラスはプラス、マイナス両面あり、どちらが良いとはいえない。</p>
理系	<p>学生の興味・能力・希望に応じた選択性の授業にして欲しい。そのためには面倒でも全授業のシラバスが必要。</p>
理系	<p>ネイティブの先生によるコミュニケーションの授業なのに実際は教材を含めて日本語のコミュニケーションに終始した。ネイティブの先生の授業に対しては生の英語や生の英会話に触れる貴重な機会として大きな期待をいただいているので、その期待に応えて欲しい。</p>
実技	<p>授業によっては、50枚くらいのレポートがばんばん出る授業があった。</p>
実技	<p>授業・レポートの内容自体はそれなりに意味があったんだけど、とにかく分量が多くてまいった。</p>
実技	<p>x x 先生の授業は、みんなが前に出て意見を述べる授業で、面白かったけど、全部日本語だったので英語の勉強には全くならなかつた。</p>
実技	<p>人前でしゃべる練習にはなつたけど英語の力は全くつかかなかつた。</p>
実技	<p>現在英語を勉強する時間はほとんどゼロ。</p>
実技	<p>英語自体はきらいじゃないし、好きだから、音楽や映画はみる。</p>
実技	<p>1・2年のころは授業で宿題が出たときだけは、少し勉強した。</p>
実技	<p>宿題が出ても、やらなくても済む授業もあって、そういうのはやらなかつた。</p>
実技	<p>英語の勉強は今してないけど、勉強しなきゃいけないって気持ちももっている。</p>
実技	<p>1・2年のときよりも、今の方が英語を勉強しなきゃいけないって気持ちは強くなってきている感じがする。</p>
実技	<p>英語の授業が無くなって逆によいしなきゃいけないって気がしている。</p>
実技	<p>たまに周りで英語を話しているのが聞こえてきて、全然わかなくて、情けなくなる。</p>
実技	<p>小学校の実習で小 の子の方が英語できるんじゃないかって思うこともある。</p>
実技	<p>僕は海外に少し行ってたこともあるんだけど、1・2年のころは英語すごいやる気があったんだけど、だんだん英語に触れる機会もすくなくなつてきて、やる気もなくなつてきてる。</p>
実技	<p>自分が小学校の教師になつたときでも、小学校の英語の時間は、簡単なことやってるし、メインでやることもないんで、そんな勉強する必要もないかなつておもう。</p>
実技	<p>英語の授業で、古事記をずっと訳すだけの授業があつて、それがちょっとやる気なかつた。</p>
実技	<p>ギリシャ神話と古事記であまり面白くなかつた。</p>
実技	<p>ギリシャ神話は豆知識がいろいろ面白かつたけど今一だつた。</p>

実技	英語だけでやる英語の授業が受けたかった。
実技	英語だけでやる授業だったから分らない人が大変だとおもう。
実技	5・6人ぐらいでゲームをやるような授業がいい。
実技	自分の専門に関係した内容を授業でやるのは面白いと思う。
実技	強制でなく希望者だけで受けられる授業があればいい。
実技	英語を勉強して何の役に立つのかがはつきり見えてこない。
実技	英語でしゃべらナイトを見ると、いろんな人が身近で英語をしゃべっているのを見ると、少しやる気になる。
実技	英語の授業は、内容しただけ、もっとあっていいと思う。
実技	TOEICなんかはあまり意識していない。
実技	TOEIC関係の授業があったら受けてみたいと思う。
実技	TOEICは大事だったことは分かっているけど、それがどんな試験でどれくらい難しいかわからないし、無理だとおもってるけど、授業があれば受けてみたいと思う。
実技	必修の授業じゃなくて、希望して受けられる授業だったらいい。
実技	学生のレベルに合わせた授業があったらいい。
実技	自己申告でレベル別の授業を受けたい。
実技	とにかく全部英語でしゃべる日本語禁止の授業をしてほしい。
実技	英語の歌をあつかう授業がいい。
実技	3・4年でも英語の授業があったらいいと思う。
実技	2年でおわったという感じじゃなくて、4年ぐらいになると就職なんかで、英語勉強しなきゃいけないって感じてがする。

《資料 4》

本学未習外国語授業に対する教育学部学生の意見 意見	
系	見
文系	折角前期で勉強したので，続けて勉強したかった。
文系	新しい言語をいちから始めたので，興味があった。
文系	後期には，人数も減って，話す機会が多くなった。
文系	スタートが一緒なので，興味があった。アルファベットから勉強できた。
文系	続けて未修外国語を勉強しようと思ったけど，しなかった。
文系	2年でも続けた。
文系	先生が日本語を理解しなかったので，何を言いたいのかわからなかった。お互いに，意志が伝わらない。
文系	新しい発見があって楽しかったが，後半は，分からなくなった。
文系	大学に入る前から，フランス語をしていたので，今もやっている。
文系	フランスに行ってみたくて，フランス語をとった。NHKの講座をやってみたが，分からなくなって，止めた。授業は，楽しかった。その後は，止めた。
文系	授業の時に自分でフランス語の本を買って勉強したが，授業でやっていることと，自分でやっていることの内容が違って，なかなか理解できず，結局，授業が終わって止めた。
文系	フランス語で，授業は楽しかったが，全然分からなくて，意欲がなくなってしまう。英語の他にしゃべるなら，フランス語がいいと思ってとつたが，自分で全然勉強せず，身につかなかった。
文系	中国語の授業は楽しく役にたった感じがする。
文系	もともと中国語か韓国語がやりたくて中国語の授業を3つ取った。
文系	全共の中国語は会話や音声の指導が面白かった。
文系	私はフランス語を選択した。日本人の先生とフランス人の先生を選べたので，フランス人の先生のクラスの先生に参加した。実践的な会話をやるはずだったのに，自己紹介レベルに留まり，実践的なコミュニケーションにはほど遠いものだった。上達のためには文法構造も習いたかったが，それはできなかつた。フランス語で何を勉強したのか思い出せない。授業での活動はMy Wayは元はフランスの歌だからということで，フランス語で歌う練習をした。その歌を学期末にテープに吹き込んだもので成績の評価がなされた。歌詞にカナをふったが，それはフランス語ではないと先生に言われ，自分で何をしていたのか理解できない。

文系	僕もフランス語を履修し、フランス旅行にも参加した。フランス人の先生と親しくなって、先生がどうやって授業を組み立てようかと悩んでいる姿を見て、大変だなと思った。もし1学期目は自己紹介のフランス語で、日本人の英語っぽい発音を徹底的に矯正する時間だった。2学期目はコミュニケーションのフランス語になって表現を学んだ。不満があるとするれば、文法的な変化等の学習もしたかった。全般的には楽しい授業だった。
文系	ドイツ語を履修。後学期はネイティブの先生を取ったが、書くことも読むことも、更にはゲームもしたし、ということでも積極的に取り組めた。いろいろところで評価もされて、楽しんでやることができた。
文系	私は全共で2コマ、外コミで2コマ、中国語を取りました。全共の1学期目と外コミの先生が同じで、全共の2学期目の先生だけが日本人でした。が、この2学期目の授業は1学期目の授業と重複する部分があって、分かっていることをやるので面白くなかった。最後のテストも同じようなものだった。コミュニケーションの授業の先生は楽しくて、ちょうどワールドカップサッカーを話題にして気さくに話げできた。
文系	僕はフランス語で、良かった点はフランス映画を見せてもらえたことと文法的な説明をしてもらえたこと。フランス語の映画は日本語の字幕付で見ただけ、とても楽しかった。
文系	ドイツ語を取った。人数が少なかったのは集中して学べて良かった。ドイツの文化についていろいろ話してもらえたのが全共の時とは違って良かった。後学期に読解をやったが、ドイツ語の長文読解は初めてで英語と違って楽しかった。ただ読解に偏りすぎたような気がするもので、少しは会話もあつたら良かったように思う。
文系	私は中国語を履修した。中国の映画を見せてもらったり、教科書に出てくる地名に関して説明してもらったり、いろいろ中国のことを知ることができて良かった。文法や単語の学習も、もともと漢文が好きだったので苦にならず楽しく学べた。さっき英語で文法や単語をやるのは高校の繰り返しでつまらなかつたと言ったが、中国語は別である。英語を話すことにはさして興味はないが、中国語はぜひ話せるようになりたい。
文系	興味があるのとないのとでは全然違います。中国語の辞書は結構引いて勉強しました。
文系	フランス語の場合、全共で抽出クラスのフランス人の先生を選ぶと、日本人の先生による文法の授業が取れなくなるのが困る。フランス人の先生で1年やって、2年になって他の日本人の先生のクラスで勉強してきた学生といっしょになると、こちらは文法をあまりやっていないので問題がある。
文系	生まれがブラジルなので。ただし誕生直後に帰国しているのでポルトガル語は全くできない。
文系	いつかフランスへ行ってみたいと思ったので。
文系	文法が英語に似ていると聞いたのでドイツ語を選択。
文系	全然話せるようにもならなかつたし、分からないまま終わってしまったので、ちゃんとやるならもっと授業があった方が良かった。でもこれ以上覚えるのは大変だなと思っていました。
文系	2年次の中国の授業は、1年次と同じような調子でやった。

文系	ドイツ語の担当の先生が1年次の後学期から外国語コミュニケーションまでずっと先生だったので 重複もななくうまく接続していた。ただ、2年次になると難しくなるので大変だった。
文系	外国語の種類がもう少し多くても良いのではないか。(例えば、韓国語(近いから)、私立だと、種類がある。)
文系	日本の学校でも、スペイン語、韓国語、ポルトガル語、中国語を話す子供がいるので、これらの言語が選択肢の中にあっても良い。
文系	やるならとことんやれるような選択肢もあって欲しい。
文系	英語プラス未修も必要(専門によって必要になる場合がある)。
文系	外国語の選択について、入学式の直後に決めると言われた。早すぎる。何も分らないうちに、決めさせられた。(考える時間が、欲しかった)(多数)
理系	英語以外にも他の外国語を学ぶ機会を持たせたことで、外国語の幅ができた。
理系	フランス語を通年で履修し、同じ先生で同じメンバ-の少人数クラスであったので、先生と学生、学生同士互いに気心が知れて勉強しやすかった。前期は主としてフランス語の文法を学び 後期にはフランスの文化についても学ぶことができた。全学共通でもフランス語をとったが、1年間2コマだけの授業では文法面、文化面いずれにしても不十分だった。その不足分を補う意味において、2年で外国語コミュニケーションのフランス語の授業があったのは、全学共通とは異なり少人数クラスの行き届いた授業だったこともあり、助かった。
理系	中国語を選択したが、中国人と話す時に使えそうな実際的な中国語を勉強できた。
理系	全学共通と外国語コミュニケーションでは担当の先生が変わってしまいうので、先生が学生の能力を把握できていない点や、前の先生のおしえ方・教材等とのへだたりがあり、あまりスムーズな連結はなかった。(フランス語選択)
理系	中国語の外国語コミュニケーションの授業では、中国語の基本的な知識がまだあいまいまいままいままな会話中心の授業に移りとまどった。全学共通は文法中心の授業であったので、そのあたりのつながりを考慮して外国語コミュニケーションの授業内容をより有機的で効率あるものにして欲しい。
実技	自己紹介ができるようになったのでよかったし役にたった。